

市指定史跡岩槻城大構確認調査  
埋蔵文化財確認調査

2018

さいたま市教育委員会



市指定史跡岩槻城大構確認調査  
埋蔵文化財確認調査

2018

さいたま市教育委員会



## 例 言

1 本書は、埼玉県さいたま市に所在する埋蔵文化財に関わる各種の調査等について報告する『さいたま市埋蔵文化財調査報告書』の第13集である。

2 本書は、岩槻城大構確認調査報告（第1部）、埋蔵文化財確認調査報告（第2部）の構成とした。

3 第1部には、平成27年度に実施した岩槻区にある愛宕神社内における岩槻城大構の確認調査の調査報告を収録した。この調査は、当該地において発生したフェンス設置工事に先立って遺跡の保存状態を確認するために実施された。調査は以下の通りに実施した。

### 岩槻城大構確認調査

1) 調査を実施した遺跡の名称及び所在地  
名 称 岩槻城大構  
所在地 さいたま市岩槻区本町3丁目

2) 調査期間

平成27年6月8日～平成27年6月23日

3) 調査の主体者・担当者は以下の通りである。

現地調査 主体者 さいたま市教育委員会

教育長 稲葉 康久

担当者 関根 俊雄（生涯学習部  
文化財保護課埋蔵文化財  
係主査、当時）

整理・報告書刊行 主体者 さいたま市教育委員会

教育長 細田 真由美

担当者 関根 俊雄（生涯学習部文化財保護課  
埋蔵文化財係長）

4) 調査に関する届出・通知は以下のとおりである。

(1) 史跡名勝天然記念物の現状変更許可申請

平成27年5月20日付、教生文第480号

(2) 上記申請に対する許可通知

平成27年5月26日付、教生文第555号

(3) 現状変更終了届

平成27年10月2日付、教生文第2122号

4 第2部には、埋蔵文化財確認調査として実施した中で平成27年度に実施した櫛谷遺跡、平成28年度に実施した小深作遺跡、平成29年度に実施した飯塚原地遺跡の確認調査状況及び出土遺物を収録した。

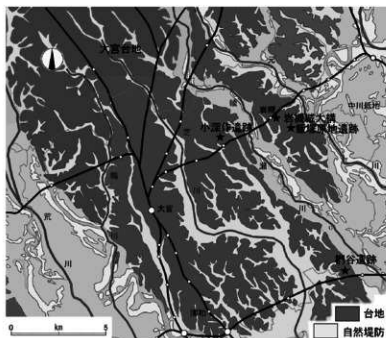
5 本書の制作は、さいたま市教育委員会生涯学習部文化財保護課埋蔵文化財係が担当し、次の通りに執筆・編集を分担した。

執筆 第1部：関根俊雄、元林恵子（II章3節瓦）

第2部：永瀬史人、吉岡卓真、鈴木久雄

編集 鈴木久雄、吉岡卓真

6 本書に収録した調査に係る出土遺物、調査写真・記録等は、さいたま市教育委員会が保管している。



第1図 収録遺跡の位置

# 目 次

例言			
目次／表目次／挿図目次／図版目次			
<b>第1部 岩槻城大構確認調査</b>		1	
第1章 調査の契機と経過	1	1	
第1節 調査の契機	1	1	
第2節 発掘調査の方法と経過	2	2	
第2章 遺跡の概要	3	3	
第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	3	3	
第2節 調査区の概要	4	4	
第3章 遺構と遺物	5	5	
第1節 遺構	5	5	
第2節 遺物	6	6	
第3節 まとめ	20	20	
<b>第2部 埋蔵文化財確認調査</b>			21
第1章 櫛谷遺跡確認調査出土遺物	21	21	21
第1節 調査の契機	21	21	21
第2節 遺構・遺物	22	22	22
第2章 小深作遺跡確認調査出土遺物	27	27	27
第1節 調査の概要	27	27	27
第2節 調査結果の概要	27	27	27
第3節 出土遺物	28	28	28
第3章 飯塚原地遺跡確認調査出土遺物	30	30	30
第1節 調査の概要	30	30	30
第2節 調査結果の概要	30	30	30
第3節 出土遺物	31	31	31
図版			
報告書抄録			

## 挿図目次

<b>岩槻城大構確認調査</b>		
第1図 収録遺跡の位置	i	i
第2図 遺跡の位置	1	1
第3図 調査区の位置	3	3
第4図 全測図	4	4
第5図 第1号土塁	5	5
第6図 第2号土塁	6	6
第7図 トレンチ出土遺物(1)	7	7
第8図 トレンチ出土遺物(2)	8	8
第9図 瓦(1) 軒瓦	9	9
第10図 瓦(2) 丸瓦	11	11
第11図 瓦(3) 平瓦(1)	12	12
第12図 瓦(4) 平瓦(2)	13	13
第13図 瓦(5) 棧瓦(1)	14	14
第14図 瓦(6) 棧瓦(2)	15	15
第15図 瓦(7) 棟飾瓦	16	16
第16図 瓦(8) 道具瓦	17	17
第17図 瓦(9) 刻印一覧	18	18
第18図 瓦(10) 参考資料	19	19

<b>埋蔵文化財確認調査</b>		
第19図 遺跡の位置と遺構・遺物出土状況	21	21
第20図 櫛谷遺跡竪穴住居跡出土埋藏	23	23
第21図 遺物包含層出土土器	25	25
第22図 遺跡の位置と遺構	27	27
第23図 小深作遺跡確認調査出土遺物	29	29
第24図 飯塚原地遺跡の位置及び調査の概要	30	30
第25図 飯塚原地遺跡確認調査出土遺物	31	31

## 図版目次

<b>岩槻城大構確認調査</b>	
図版1 (1)第1号土塁 (2)第2号土塁	
図版2 (1)第7図1～28	
図版3 (1)第8図29～40	
図版4 (1)第9図1～12、第10図13・14	
図版5 (1)第10図15～21、第11図22～24	
図版6 (1)第11図25～29、第12図30～31	
図版7 (1)第12図32～38	
図版8 (1)第12図39～41、第13図42～45	
図版9 (1)第13図46～49、第14図50	
図版10 (1)第14図51～57、第15図58	
図版11 (1)第15図59～61、第16図62～69	
図版12 (1)刻印 (2)漆喰付着瓦・漆喰塊	
図版13 (1)第20図1 (2)第20図2	
図版14 (1)第21図1～28	
図版15 (1)第23図1～31	
図版16 (1)第25図1～20	

# 第 1 部

## 岩槻城大構確認調査

### 第 I 章 調査の契機と経過

#### 第 1 節 調査の契機

平成27年4月、さいたま市岩槻区本町三丁目におけるフェンス設置工事にあたり埋蔵文化財の所在について、工事主体者よりさいたま市教育委員会に照会があった。建設予定地はさいたま市指定史跡岩槻城大構の範囲内にあたるため、その取扱いについて協議を行った。その結果、工事に先立って遺跡の保存状態を確認するための試掘調査を実施することとなり、平成27年5月13日付けで、工事主体者よりさいたま市教育委員会教育長宛に確認調査依頼が提出された。当該地はさいたま市指定史跡内であるため、さいたま市教育委員会教育長が発掘調査のための現状変更許可申請書をさいたま市教育委員会教育長宛に提出し、5月26日付けで許可となった。これを受け、平成27年6月8日から23日にさいたま市教育委員会による試掘調査を行った。



1:岩槻城大構 2:岩槻城跡(新曲輪・鍛冶曲輪跡) 3:岩槻城跡 4:岩槻城大構跡 5:岩槻藩運番館

第2図 遺跡の位置 (1/25000)

## 第2節 発掘調査の方法と経過

## 1 方法

今回の調査は神社境内地でのフェンス設置工事に先立ち、当該箇所における遺跡の保存状態を確認するために実施した。調査はフェンス設置予定箇所の愛宕神社の社殿南側に東西方向に2本のトレンチを設定して実施した。トレンチは植栽などにより作業スペースに制限があったため連続した1本のトレンチではなく東西で分断し、西をAトレンチ、東をBトレンチとした。調査はAトレンチから開始した。人力により表土を除去し遺構面である土塁の検出を行った。並行してBトレンチの表土除去を行い、土塁の上面を確認した。遺構確認後記録作業を実施し人力による埋め戻しを行った。調査終了後、現状変更の終了届を提出した。また、今回の試掘調査により遺構の所在が確認されたため、平成27年6月29日付けで今回の調査範囲を含む大構が存在すると想定される範囲を埋蔵文化財包蔵地として登録した。

## 2 経過

発掘調査は平成27年6月8日から平成27年6月23日まで実施した。6月8日、調査区の設定を行う。社殿南側のフェンス設置予定箇所に1m×9mの調査区を設定する。トレンチはAトレンチとし西からA1～A9とグリッドを設定し、遺物をグリッドごとに取り上げることとした。A1～A9グリッドの表土除去を開始し、地表面下5～10cmほどで砂利層が検出される。そのうちA4～A7グリッドでは砂利の堆積が厚くなることが確認された。6月10日、Aトレンチの調査を継続する。A1～A6グリッドで砂利層の掘削を行う。磁器・瓦破片が少量出土するが、ガラス・ビニールも混入する。砂利除去後、さらに下層の掘削を開始する。粘土と砂が混入する締りの強い暗褐色土である。6月11日、Aトレンチの調査を継続し、表土の掘削を行う。A5・A9グリッドで攪乱が確認されたため、その掘削を行う。攪乱の壁面を観察したところ、地表面より約50cmでローム盛土層を確認する。Aトレンチの南側に、新たにBトレンチを設定し調査を開始する。1m×7mのトレンチとし、グリッドを設定し西側よりB1～B7グリッドとした。6月12日、A1～A5グリッドの掘削を行う。攪乱の壁面で確認されたローム盛土より西側は急激に落ち込み、社殿の建物より西側は表土の堆積が厚くなる。Bトレンチは調査を継続し表土の掘削を行う。6月15日、A3～A5グリッドでローム盛土により構築された、土塁の西側斜面を確認する。Bトレンチで表土の掘削を継続する。表土上層の砂と砂利が混入する層の下層で黒褐色土層が検出されたので、その層まで表土を掘削することとする。黒褐色土層はB1～B3グリッドの範囲で確認された。6月16日、Aトレンチ西側で砂利下層の表土の掘削を継続する。土塁構築土であるローム盛土の続きを確認する。Aトレンチで調査区土層の分層を行った後、写真撮影を行う。Bトレンチで、表土上層の砂・砂利混じりの層の掘削を行った結果、トレンチ全体でローム盛土を検出する。B1～B2グリッド付近では南へ向かい傾斜し、B3～B7ではフラットであるが上層はあまり締りが無い。6月17日、Aトレンチの調査区の土層図を作成する。Bトレンチは調査を継続し、表土の掘削を行いローム盛土を確認する。盛土は傾斜しており南が高く北へ向かい低くなっている。6月18日、Aトレンチの平板図作成、Bトレンチの写真撮影を行う。6月22日、Bトレンチの平面図、土層図を作成する。A・Bトレンチ内のレベルを計測し、トレンチ位置図を作成する。6月23日、人力により調査区の埋戻しを行い現地での作業を終了する。



## 第Ⅱ章 遺跡の概要

### 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

岩槻城大構はさいたま市の東部、東武野田線岩槻駅から東約1.5kmの岩槻区本町三丁目地内に所在する。現在周知されている埋蔵文化財包蔵地の範囲は東西約38m、南北約39mである。

遺跡は大宮台地の東縁部にあたる岩槻支台上に占地している。岩槻支台は南流する綾瀬川により、大宮台地主台との間を画され、北西から東側を流れる元荒川によって慈恩寺支台との間を画されている。台地上は概ね西から東へ緩やかな傾斜を帯び、さらに沖積地から伸びる開析谷が樹枝状に発達している。岩槻城の主郭部は台地東縁部の舌状台地上に占地しており、今回の調査された大構は主郭部の西方に位置している。

岩槻城大構は岩槻城と城下町の周囲を取り囲む土塁と堀の総称である。大構は天正年間に豊臣秀吉の関東侵攻に備えて築造されたと考えられており、土塁と堀が総延長約8kmにわたり城下町を取り囲んでいたといわれている。現在は大構の土塁はそのほとんどが現存しておらず、今回の調査地点にあたる愛宕神社境内に残る大構は貴重な遺構としてさいたま市の指定史跡となっている。岩槻城の主郭部では各種開発に伴う発掘調査が行われているが、平成14年には諏訪小路武家地内の大構跡において発掘調査が実施されている。土塁は基底部のみが残るだけであったが、調査結果により同地点での土塁基底部幅は7.7m、土塁構築面から堀底までは深さは4.1mと確認された。また、堀底では堀障子1基が検出されて



第3図 調査区の位置 (1/2500)

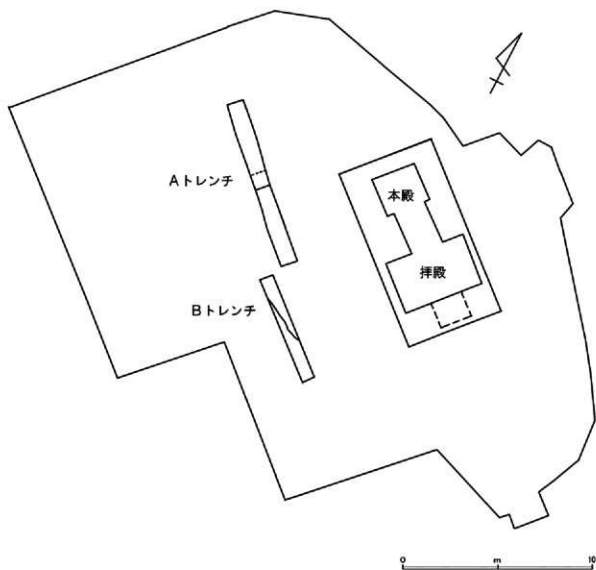
## 岩槻城大構

いる。

今回調査された大構は史跡指定当時の資料によると規模は高さ5間(9.0m)、底辺7間(12.0m)となっている。また、昭和47年には西・北・東部がセメントにより補強され、現在みられる景観となっている。

### 第2節 調査区の概要

今回の調査範囲は、工事予定範囲に設定したトレンチ状の調査区16㎡である。調査の目的が史跡の保存状況を確認することだったため、遺構確認面は土塁構築時の盛土までとした。検出された盛土は土塁本体であるため史跡の保存のため掘削は行わなかった。遺物は表土中より近世の陶磁器・瓦などが180入り平箱3箱出土した。



第4図 全測図

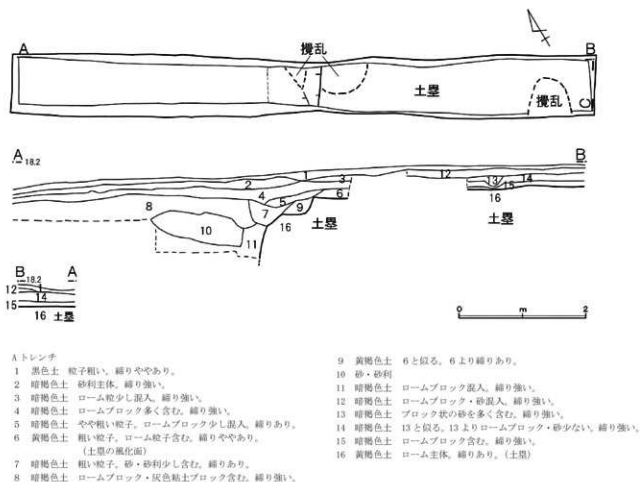
## 第三章 遺構と遺物

## 第1節 遺構

## 1 土塁

## 第1号土塁 (第5図)

Aトレンチ中央から東寄りで検出された。調査区東端から4.36mまで土塁上の平場で、そこから西へ向かって傾斜している。土塁上場の東端は一部攪乱を受ける。検出範囲で確認したところ、土塁の延伸方向は西側の道路と並行してほぼ南北方向であったものと思われる。検出された土塁は黄褐色土でローム土によって築造されたものと考えられる。土塁壁面は一部風化により脆い箇所もあったが、全体的には締りが良く残存状態は良好であった。



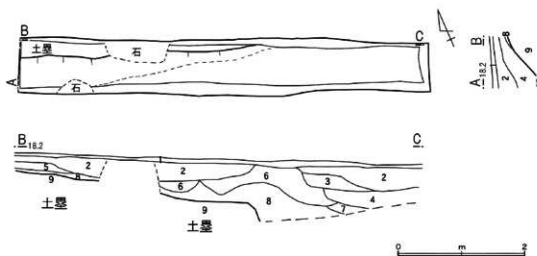
第5図 第1号土塁

## 第2号土塁 (第6図)

Bトレンチの中央から北西で検出された。調査区西端から4 m 13cmの範囲で、土塁上場の平坦面が確

## 岩槻城大構

認められた。平坦面は西側は広く東へ向かい幅が狭くなる。第1号土塁は南北方向に延伸していたが、2号土塁は東西方向へ延伸していることが確認された。平坦面から南東へ向かい急激に落ち込んでいる。壁面は第1号土塁と同様に締まりがよく残存状態は良好であった。



### Bトレンチ

- 1 黒色土 粒子粗い。締りややあり。(表土)
- 2 黄褐色土 砂・砂利主体。締り強い。
- 3 暗褐色土 粗い粒子。砂利少し混入。締りあり。
- 4 暗褐色土 ローム粒少し混入。締りあり。
- 5 暗褐色土 砂利主体。締り強い。(Aトレンチ2層と似る。)

- 6 暗褐色土 粗い粒子。ローム粒・砂利少し混入。締りあり。
- 7 黄褐色土 砂・砂利主体。締り強い。
- 8 黄褐色土 粗い粒子。ロームブロック混入。締りややあり。
- 9 黄褐色土 ローム主体。締り強い。(土塁)

第6図 第2号土塁

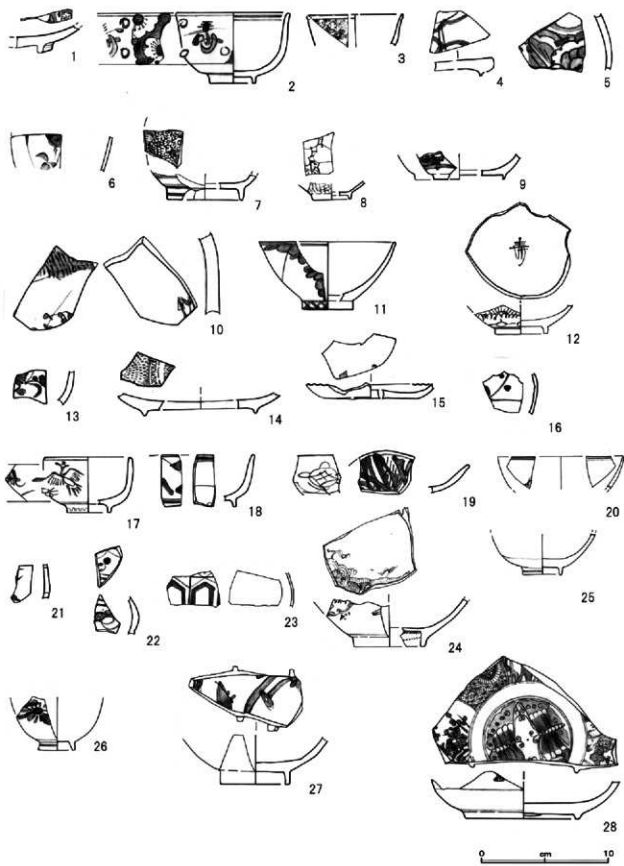
## 第2節 遺物

### 1 Aトレンチ出土遺物 (第7図)

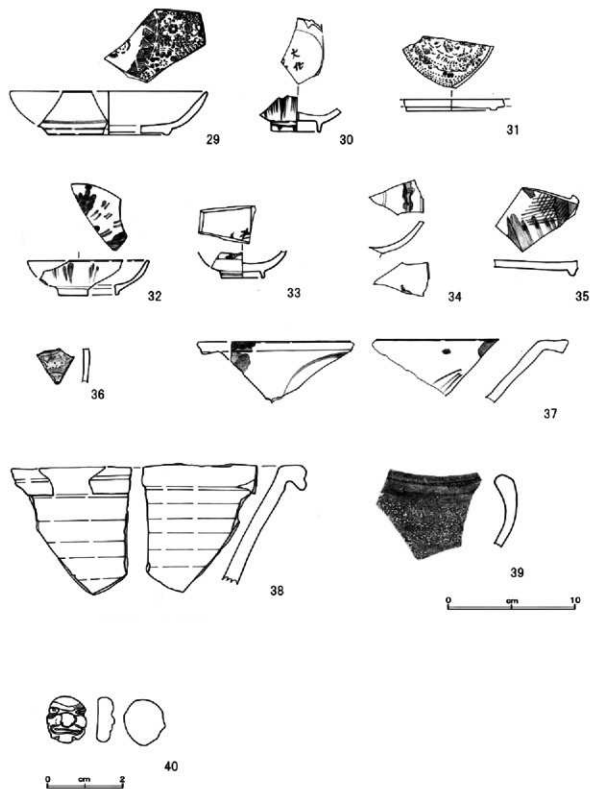
第7図1はA2グリッド表土中より出土した染付皿の底部破片である。内面染付、高台外面に二重圏線、見込みに圏線が見られる。

### 1 Bトレンチ出土遺物 (第7図)

第7図2～4はB3グリッド表土中より出土した。2は瀬戸の染付碗で外面に「寿」と花文が描かれる。残存率は1/2である。3は染付碗の口縁部破片である。外面染付で人物が描かれる。4は染付皿の底部破片である。内面染付で、高台を欠く。5～10はB4グリッド表土中より出土した。5は染付瓶の肩部破片である。外面に草花文が描かれる。6は染付碗の胴部破片で外面染付である。7・8は肥前の染付皿でいずれも底部破片である。9は染付皿の底部破片で外面染付である。10は鉢の胴部破片である。11～16はB5グリッド表土中より出土した。11は染付碗で外面染付、残存率は1/4である。12は染付碗の底部破片で見込みに「寿」、外面は染付である。13は染付碗の胴部破片である。外面に草花文が描かれる。14・15は染付皿で14は底部破片、内面染付、外面に圏線が見られる。15は口縁から底部にかけて



第7図 トレンチ出土遺物 (1)



第8図 トレンチ出土遺物(2)

の破片である。内外面とも染付である。16は陶器で胴部破片である。瓶と思われる。17～36はB6グリッド表土中より出土した。17は染付碗で外面に鳥、口縁内部に二重圏線が描かれる。残存率は1/4である。18は染付碗の破片で外面染付、内面に圏線が見られる。19は染付皿の破片で、内外面とも染付である。20は染付碗の口縁部破片、21は口縁部から底部の破片である。ともに外面は染付、内面に圏線が見

られる。22・23は染付碗の胴部破片である。24～27は染付碗の底部破片である。24は白玉による焼継があり、内面染付は龍と思われる。25・27は高台に砂目、26は外面に花文、27は内面染付である。28は染付皿で、内面見込みに蝶、その外周に草花文が描かれ、外面底部に二重圏線が見られる。29は染付皿の口縁部から底部の破片である。内面は草花文、外面に二重圏線、高台内は無軸である。30・31は染付皿の底部破片である。30は見込みに「大化」、外面は染付、31は内面に草花文が描かれる。32は染付皿の口縁部から底部破片である。内外面とも染付である。33～36は染付皿の底部破片である。33は内外面染付、34は高台を欠く、35・36は内面染付である。37・38は陶器甕の口縁部破片である。口縁が外反する。39は陶器甕の口縁部破片で無軸である。40は泥面子である。

### 3. 瓦 (第9～18図)

瓦は破片数で485片出土した。大構を覆う50～80cm厚さの表土層出土で遺構との関係は捉えられないが、近年近世瓦の研究が進められており、資料を提示するものである。大構外側のA区で157片、大構内側のB区で315片、表採13片である。出土遺物の半分以上を占める。その内69点を示した。出土瓦の種類は、平瓦、丸瓦、軒棧瓦、棧瓦、棟瓦、棟飾瓦、鬘斗瓦、伏間瓦等がみられるが主体は平瓦・棧瓦の破片で、原形を確認できるものはなかった。表面の色調は暗灰色～暗青灰色を呈すが黒色や一部銀化した瓦も認められる。内部は灰～暗灰色を呈す。胎土はやや砂質で黒灰～黒褐色粒が混入するほか、胎土・調整の異なる瓦が僅かに混在している。道具瓦等に加工・転用された(凹面に櫛目状工具痕が付く)破片、漆喰が付着した破片も多くみられた。また被熱し褐色～橙色を呈する丸瓦、平・棧瓦片が散見する。大正12年関東大震災を機に広く普及した掛棧瓦片がB-1区でまとまって出土している。遺物番号



第9図 瓦(1) 軒瓦

## 岩機城大構

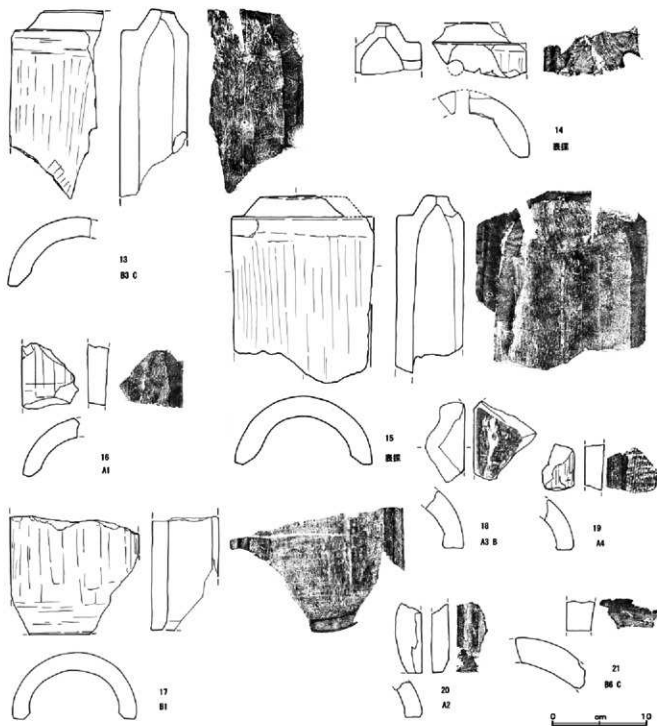
の下に出土位置を記した。数字の後のb・cは中層・下層を意味する。巴文は尾から頭の方で右巻・左巻、計測部名称は加藤・金子文献(1990)に依る。

1～12は軒棧瓦である。1は全幅29.8cm、厚さ1.8cm。丸部瓦当径7.6cm・文様区径4.8cm、平部瓦当厚4.8cm・文様区幅13.8cm・周縁高0.6cm、棧幅4.1cm。色調は表面は黒灰色で内部は灰色を呈す。丸部瓦当は12連珠左三つ巴文、平部瓦当は樹枝及び珠文からなる中心飾り、くびれを有する唐草上下2反転、脇に子葉がつく均整唐草文である。「東海式」の文様に似るが、中心飾り中央は大小の連珠が縦列する。上面周囲粗く面取りされる。刻印は右周縁文様区際に施される。隅丸方形枠内に「喜」。2～5は丸部である。2は連珠右三つ巴文で珠文が4つ残る。厚さ1.8cm、棧幅4.7cm。3は連珠のみ残る。厚さ2.1cm。4は三つ葉藤様の文様である。離材キラコが多く付着しやや銀化する。厚さ2.4cm、復元瓦当径8.6cm。5は下部小片。瓦当は剥離し周縁のみ残る。復元瓦当径7.7cm、厚さ2.7cm、周縁幅1.4cm。色調は灰色でキラコが表面に付着する。6～12は平部である。6は頸部で花様の中心飾り、下向き唐草が残る。所謂「江戸式」文様である。文様区の平坦面に范の木目が残る。焼成良好で堅緻である。7は1と同文、厚さ1.6cm、瓦当厚4.9cm、頸下部厚1.8cm。8は唐草と子葉が残る。頸下部厚1.6cm。9は唐草が2つとも下向きで唐草上下2反転に先行する先行する文様である。銀化する。厚さ1.9cm、瓦当厚4.7cm。10は子葉のみが残る。脇右の中央に刻印が捺される。隅丸方形枠内に「喜」。キラコ付着。11は滴水瓦である。文様は紡錘型の珠文と逆滴状3枝の中心飾り・唐草からなり、珠文と唐草が重線である。厚さ1.9cm、瓦当厚4.6cm。12は11と同類。1・7を除いて瓦当に離材キラコが付着する。

13～21は丸瓦である。13は凸面縦方向ナデ調整・狭端縁のみ横ナデ、凹面に布目痕、コビキB痕が明瞭に残る。厚さ1.9cm、高さ7.8cm、玉縁長2.1cm。14は厚さ2.5cm、玉縁幅2.1cm、孔径1.6cm。15は凸面縦方向ナデ調整・狭端縁のみ横ナデ、凹面に布袋痕、棒状痕が残る。全幅14.8cm、高さ7.3cm、玉縁長2.1cm、玉縁幅11.5cm。16は広端縁付近の側縁小片で凸面ナデ調整、凹面に布目痕がつく。厚さ2.1cm。17は凸面ナデ調整・広端縁のみ横ナデ、凹面に布目痕、コビキB痕が明瞭に残る。広端、側縁内側の面取りが狭い。厚さ1.8cm、高さ6.8cm、全幅13.5cm、玉縁長2.1cm。18は広端縁片。凹面側縁内側の面取りがなく切り放ち形である。凹面に紐痕あり。厚さ2.1cm。19は側縁小片。凹面布目痕が明瞭。側縁は切り放ち形。厚さ1.8cm。20は広端縁片。凹面に棒状痕が残る。広端部の面取りは1.7cmと狭い。側縁は切り放ち形である。厚さ1.9cm。21は狭端縁付近の小片。灰色で砂質。凸面はナデ、凹面に布目痕残る。厚さ2.4cm。13～16は18世紀代、17～20は19世紀代の様相を呈すか。

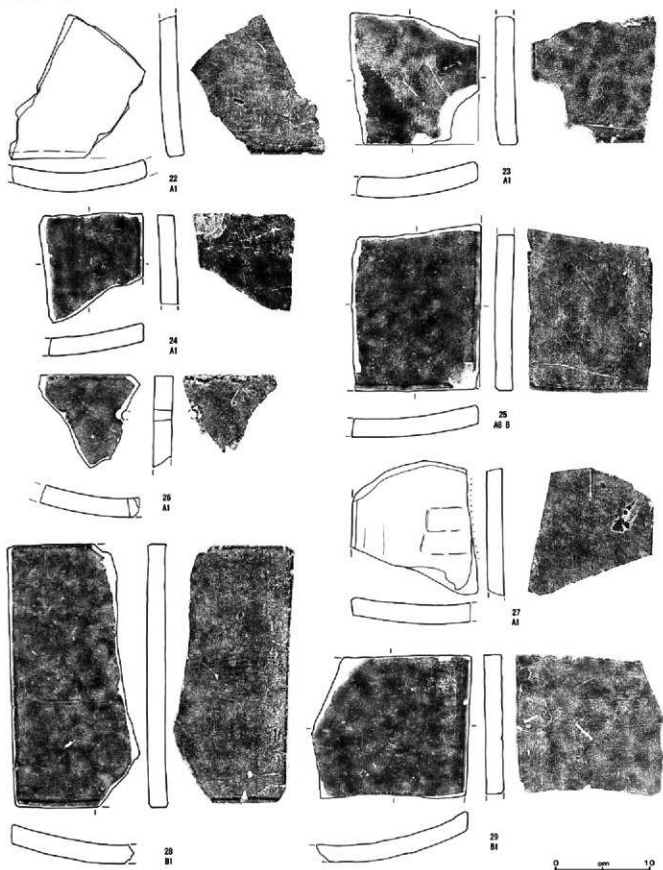
22～40は平瓦と捉えた。いずれも加工・再利用されたとみられる。挿图中的の「……」は凹面上端の櫛目状工具痕を指す。22～27・41はA区出土、28～40はB区出土である。22は凹面は横ナデ・キラコ仕上げ、凸面にコビキB痕残る。頭部以外の三面は櫛目状工具痕残る。厚さ1.9cm。23は凸面に離れ砂痕。厚さ2.1cm。24は左側破断面に櫛目状工具痕。厚さ1.8cm。25は頭部右側。凹面横ナデ・端面面取り、凸面コビキ痕B・ナデ調整。左側破断面に櫛目状工具痕。厚さ1.9cm。26は尻部。凹面はキラコ仕上げ、凸面は木口ナデ痕がつく。径1.1cmの焼成前穿孔あり。厚さ1.9cm。27は凹面横ナデ・キラコ仕上げ、凸面はコビキB痕・木口ナデ痕あり。厚さ1.9cm。28は頭部上側2段ナデ、下側ナデ切。色調は灰白色・内部が灰色の胎芯状。胎土は粘土質である。全長27.2cm(≒9寸規格)。厚さ1.9cm。29も胎土は胎芯状である。厚さ1.8～1.9cm。30は尻部左側片。色調は褐灰色。凹面横ナデ・キラコ少し付着、凸面はコビキ痕B・砂目痕あり。下側と右側の破断面に櫛目状工具痕。厚さ2.0～2.1cm。31は尻部左側片。凹面横ナデ・面取り、凸面ナデ調整あり。下側と右側の破断面に厚さ1.9cm。32は灰色で砂質、凹面に横ナデ。



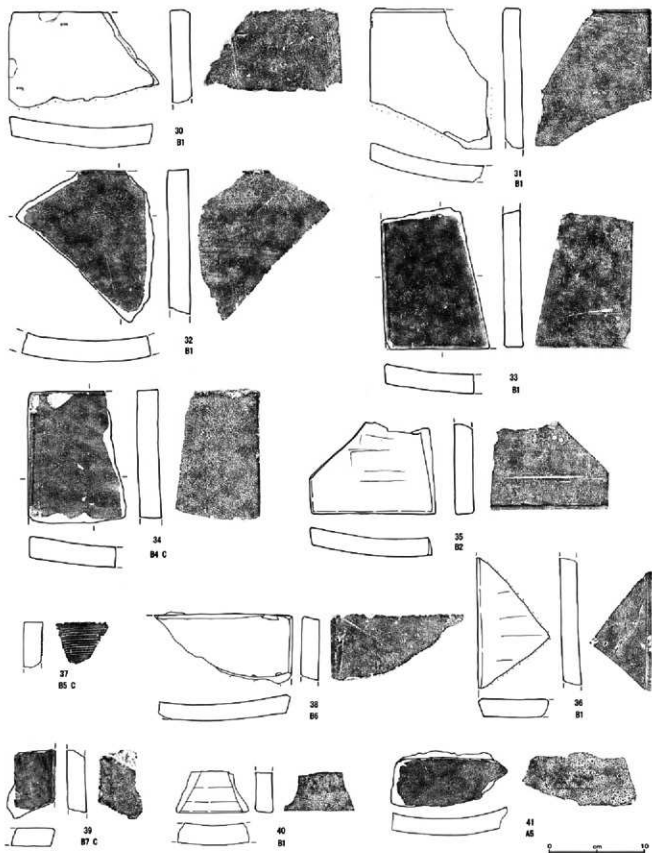


第10図 瓦(2) 丸瓦

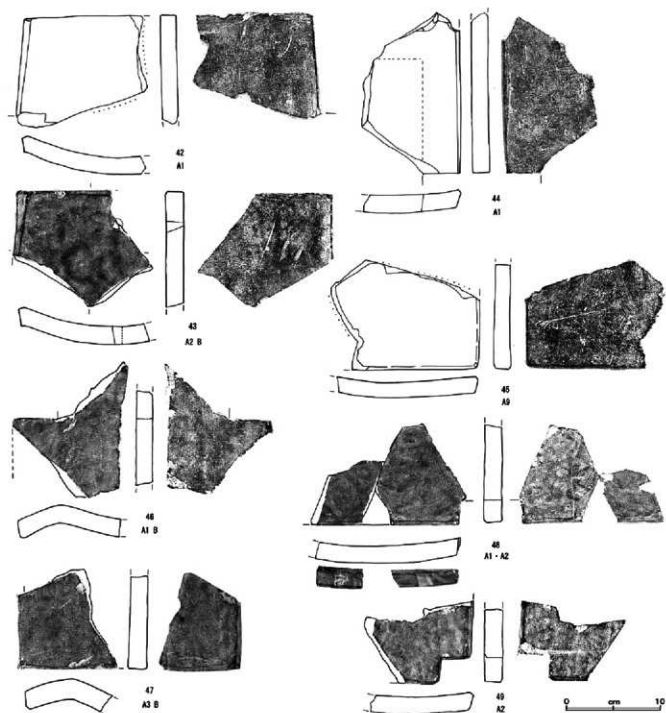
凸面に離砂付着、横ナデ調整。厚さ2.3cm。34は砂質で青黒灰色。凹面キラコ付着、凹面砂目痕。右側破断面に櫛目状工具痕。厚さ2.2cm。36は灰色で砂質。側縁部を櫛状工具で角状に加工されている。凹面はナデ、凸面には砂目痕がつく。37は尻部片で凸面に櫛目状痕がつく。38は尻部右隅片。破断面は擦られ、面戸瓦に再利用されたと思われる。39は岩槻城跡出土瓦中にみられる軟質（粘土質で焼成が甘い）瓦と同類である。40の凹面は黒灰色でキラコが付着する。凸面に離れ砂が付着する。厚さ2.0cm。41の



第11圖 瓦(3) 平瓦(1)



第12図 瓦(4) 平瓦(2)

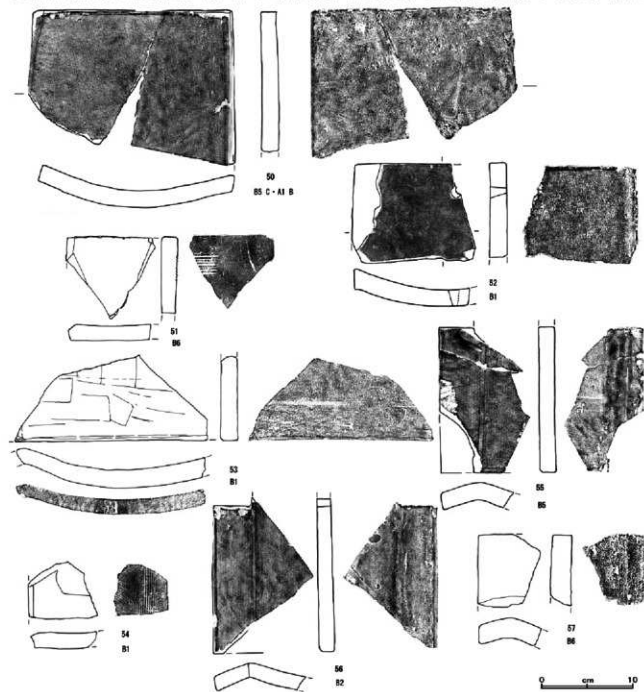


第13図 瓦(5) 棧瓦(1)

凹面は銀化しキラコが付着する。破断面に工具痕が明瞭に残る。凸面には離砂が付着しキラコもまばらにつく。厚さ1.8cm。

42～49は棧瓦である。42～49はA区出土、50～57はB区出土である。42は表面の色調青黒灰色で内部灰色、やや砂質の胎土に黒灰色粒を含む。凹面横ナデ、厚さ1.7cm、棧部切込長10.8cm。43は表面色調黒灰色で胎土灰色を呈す。凹面は横ナデ、凹面はコビキB痕・ヘラナデ・離砂付着。厚さ1.9～2.0cm。尻部に焼成前に穿孔された孔径1.2cmの釘穴1個が残る。44は凹面にキラコ付着。厚さ1.9cm、平部切込幅3.0cm。45は凸凹面にキラコ付着。凸面は糸挽き状の痕が付く。46は棧部。厚さ1.9cm、切込幅4.1cm、

遺存から切込長は6cm以上と推測できる。47は棧部で上面キラコ付着し銀化する。厚さ1.9cm、棧幅4.4cm。46・47は同系。48は平部。厚さ1.8cm、切込長2.7cm。頭部に刻印あり。方形枠内に「喜」。A1とA2で接合した。49は平部で厚さ1.8cm、切込幅2.7cm、切込長3.2cmを測る。右側斜破断面上側に楕円状工具痕あり。50は色調青黒灰色で胎土灰色。凹面キラコ仕上げ、凸面離砂痕、厚さ1.8cm、尻部幅21.0cm、棧部切込長8.6cm。B5とA1で接合。51は棧部切込部片。砂質。凹面は銀化する。凸面は灰色。尻部面取り・8条1単位の楕目痕がつく。厚さ1.7cm。52は50と同系。凹面に刷毛痕明瞭。尻部に焼成前に穿孔された孔径1.2cmの釘穴1個が残る。厚さ1.8cm。53は平部、頭部中央に刻印あり。方形枠内に「喜」。凹面横ナデ、黒色だがキラコ付着。凸面灰色ナデ痕。厚さ1.8~1.9cm。54は棧部切込部片。凹凸両面・側面共平滑な仕上げ。凹面に縦・横・斜めの楕目残る。厚さ1.7cm。55は棧部で頭部が少し残る。棧部の

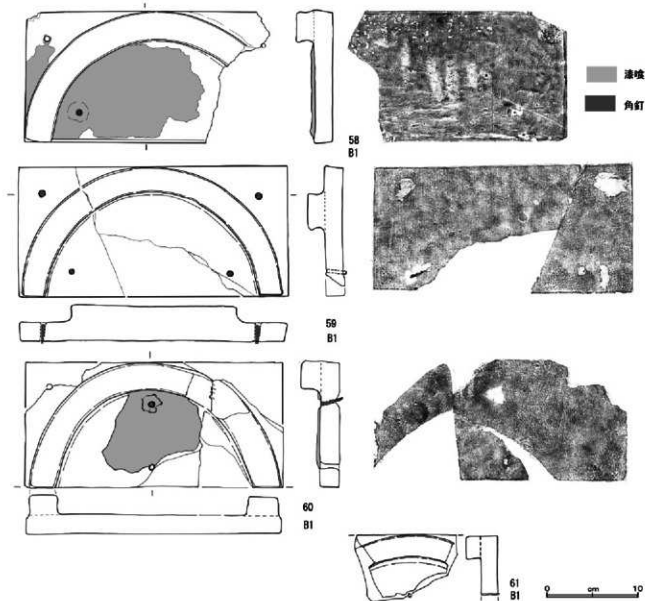


第14図 瓦(6) 棧瓦(2)

## 岩槻城大櫓

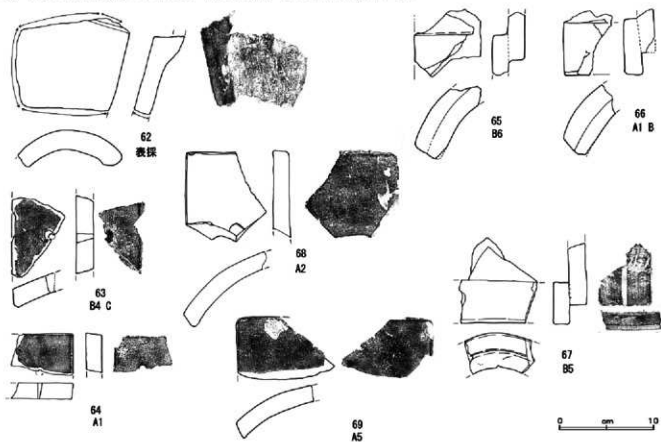
法量は厚さ1.8cm、長さ15.5cm、切込幅3.7cmである。56は棧部で頭部がわずかに残る。棧部の法量は厚さ1.7cm、切込幅が3.8cm、棧の長さ15.7cmを測る。57は棧部だが、輪違瓦様に加工されている。厚さ2.1cm、切込幅3.8cm。掲載外で棧部の破片が多く見られることから、棧部を破棄し平部は再利用されたと考えられる。

58～61は棟飾瓦である。幕末の瓦で組み合わせて青海波を構成する（金子智氏のご教示による）。縦13.5～14.5cm×横28.0～29.0cm×厚さ1.9cmの粘土板の上に幅3.3cm、厚さ1.9cmの半弧状の粘土を弧を上にして貼り付けている。破断面から、接着のためにつけられた2.5cm幅で5条の櫛目が観取できた。焼成前に穿たれた孔径0.5～0.6cmの釘穴が4ヶ所あり、中に頭部0.3cm角の角釘が遺る。孔の位置は弧の外側上部左右に各1ヶ所あり、それらと弧の内側下位に横列して2ヶ所（58・59）或いは弧の内側中央に縦列して2ヶ所（60）の何れかをセットにした2パターンある。表面には4～5ミリ厚さで漆喰が塗られ、釘穴も覆われる。58～60は同系で半円の外径は27cmである。58の背面には制作時の指痕が残る。62はやや小ぶり、厚さ3.5cm、粘土幅は2.5cm、推定外径は24cmである。



第15図 瓦(7) 棟飾瓦

62～69は道具瓦類である。62は丸瓦の上部を加工して輪違瓦に転用される。63は熨斗瓦か。凸面に丁寧なナデ調整。左端に刷毛目が付く。凸面から焼成前に1.0cmの釘穴が穿たれる。凸面では径0.5cmである。厚さ1.9cm。64は隅が直角を成す小片である。表面はハケナデがありやや銀化している。上縁から3.4cm、右側縁から3.0cmの位置にとこに焼成前に穿たれた径0.6cmの釘穴がある。丁寧なナデや孔の位置、反りのない平坦な形状から海鼠瓦と捉えた。厚さ1.6cm。65～69は伏間瓦片であろう。65は凸凹面共黒灰色を呈し銀化する。キラコが付着する。胎土は粘土質で灰白色、内部が灰色の胎芯状である。厚さは1.8cm。66は灰色で胎土はやや砂質。凸面は銀化しキラコが散見する。凹面は布目条痕が付く。厚さ1.8cm。67は褐灰色で胎土は粘土質。凸面はやや銀化する。凹面には布目痕と2本の細い棒状痕がつく。厚さ1.8cm。68・69は尻部片である。色調は黒灰色。胎土は灰色で胎土はやや砂質。凹面は横ナデの間からかさかさに布目条痕がみられる。厚さ1.8cm。68の凸面は銀化する。



第16図 瓦 (8) 道具瓦

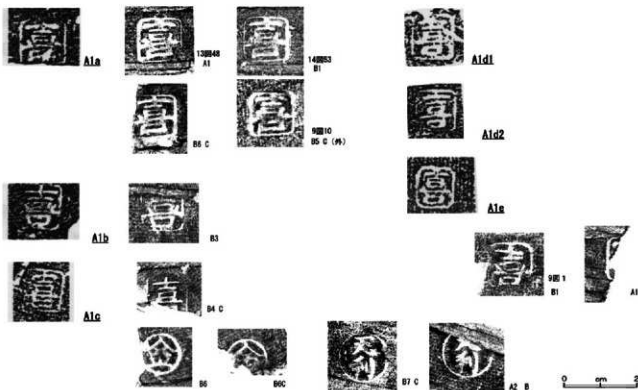
以上検出した瓦の厚さは概ね2.0～2.1cm、1.8～1.9cm、1.6cmの3種類である。整形はキラコ少々付着、雕材キラコ使用、キラコ仕上げがみられた。瓦当文様は、丸部は連珠を伴う巴文、4は愛宕神社神紋や宮司家紋ではない。平部の文様は「江戸式」文様と「東海式」系の文様がある。また唐草の向きは中心からみて下・上と下・下の2種類みられた。製作時期や地域の異なる瓦が混在する様相が捉えられる。漆喰が厚く付着した破片を図版に掲載した。

## 岩槻城大構

### 刻印について

刻印は12片に確認された。掲載外8片の刻印の位置は平・棧瓦頭部である。大別すると、方形枠内に「喜」が7点、円内に「金」が2点、円内に縦書きで「天利」が2点、不明1点である。大きさは方形「喜」が縦1.2cm前後×横1.2～1.25cm前後、円に「金」が径1.1cm、円に「天利」が径1.4cmである。

2004年当時岩槻市内（現岩槻区内）採取・出土の刻印集成が報告されている（岩槻市2004）。そこでは刻印が文字か記号か、次に刻印の形状で分類され、4群・11種類を提示する。A群は方形で「喜」、「宗」、「平」、「定」か（ママ）、「天」か（ママ）、とある。B群は長方形で「上宮」右横書、「彦上」右横書、「定武」右横書、枠なしで「定武」右横書である。C群は円形で「大」、D群は円形に記号陽刻「+」あるいは「十」か（ママ）、円（○）のみ、である。今報告の円形に「金」、円形に「天利」（縦書）は新出で、この2例を加えると岩槻区内では4群・13種類となる。刻印A群1と分類される「喜」は更にa～eの5例に細分されている（17図A1a～A1e）。「喜」の分類を試みたところ、B6出土の1点がf（6例目）の可能性があると捉えられた。近年では三の丸武具藏跡第5地点でも棧瓦頭部に「喜」が確認されている。岩槻区所在の明治前期に建てられたと推定される国の登録有形文化財「長谷川家住宅旧店蔵及び主屋」に葺かれている軒棧瓦瓦当や棧瓦頭部中にも刻印が認められる（方形に「喜」「宗」、円形に「作」）。また昨年の埋蔵文化財研究集会資料に各県の刻印資料がまとめられて



出土事例 **A1a**: 岩槻城本丸跡（棧瓦頭部中央）、**A1b**: 遷喬館三次（軒棧瓦瓦当・棧瓦頭部）、**A1c**: 入山高地貝塚第2地点（軒棧瓦（滴水瓦）瓦当・棧瓦頭部中央）、**A1d1**: 龍門寺山門礎石地業（棧瓦頭部）、**A1d2**: 遷喬館二次（棧瓦頭部）・遷喬館三次（軒棧瓦瓦当・棧瓦頭部）、**A1e**: 黒谷貝塚土坑（平瓦頭部・軒棧瓦瓦当）

第17図 瓦（9）刻印一覽



おり、「11. 埼玉県」では騎西城妙光寺出土の1点が報告されている。今回確認できた12点をあげて、今後の検討に備える。

#### 出土瓦の背景

瓦が出土した大構の上には愛宕神社本殿・拝殿が座している。『新編武蔵風土記稿』巻之二百二埼玉郡之四岩槻領久保宿に「三光寺 天台宗、東叡山の末、愛宕山満蔵院と號す、本尊地藏、開山元立寛永年中起立とのみ傳へり、愛宕社、稲荷社、松尾社」とある。岩槻市史等には愛宕社は別当寺の三光寺境内に祀られていたこと、寛永年中（1624～1643：岩槻藩主阿部家の時代）に開山の三光寺は近世末期に無住となり、慈恩寺末寺の正福寺が留守居役をつとめていたこと、明治初期に廃寺となりその跡に愛宕社宮司家が居住・代々奉仕していることが記される。藩政史料には「城主屋形普請の地鎮祭で正福寺の伴僧三光寺」と貞享三（1686）年七月に記録が残る。9図11・12の滴水瓦は、平成元年に調査された入山高地貝塚第2地点建物地業層で同文様の瓦が出土している（18図）。岩槻区所在の慈恩寺観音堂（現本堂）は天保14年（1843）に再建後、大正12年の関東大震災で被災し、修理を終えたのは昭和4年とのこと。その折、無文の滴水瓦に葺き替えられており、入山高地出土資料は修理の時に処分された瓦の可能性が指摘されている（岩槻市2004）。岩槻城内では今のところ確認されておらず、慈恩寺との関わりが推測されよう。

現在本殿は瓦葺き、拝殿は銅葺きである。『神社明細帳』には神社拝殿は大正12年9月の大地震で全潰、13年11月に再建竣工と由緒追記がある。また昭和41年の修理碑が建つことから、いずれかの時に破砕瓦片が廃棄されたものと捉える。地業に瓦を使う例はあるが、調査区以外の地表にも瓦が散見しており、破片は外から持ち込んだものではなく、本殿の屋根に葺かれていたものと考えられる。

『埼玉のかわら』の『明治8年瓦生産者取調』による分布図では生産者は埼玉県東部（葛飾郡・埼玉郡）に集中している。9図1・7の東海式系文様瓦は、入山高地貝塚の他、時の鐘廻隔瓦（嘉永6（1853）年の棟札から鐘樓の改修が知られる）、黒谷貝塚土坑出土瓦（出土遺物の様相から19世紀後半～20世紀初頭に解体された建物の屋瓦とされる）、前述の長谷川家住宅旧店蔵にも同文瓦が認められる。瓦葺きは傷んだ瓦だけ差替え補修すれば総葺き替えせずに長期使用できる特性を持つ。大構出土瓦は編年観では18～19世紀と捉えられるが、葺かれていた時期などは確定できない。



第18図 瓦 (10) 参考資料

## 岩槻城大構

<引用・参考文献>

- 今泉潔 1984 「「朽木棧瓦」の造瓦器具と製作技術」『物質文化』(42) 物質文化研究会
- 岩槻市 1981 『岩槻市史近世資料編III 藩政史料』
- 岩槻市 1982 『岩槻市史近世資料編IV 地方史料』
- 岩槻市 1985 『岩槻市史通史編』
- 岩槻市教育委員会 1999 『平成10年度岩槻市内発掘調査報告書』
- 岩槻市教育委員会 2004 『岩槻状園遺跡群発掘調査報告書3 岩槻城大構跡・諏訪小路武家地の調査』
- 加藤晃 1989 「江戸時代の瓦における「江戸式」の展開—軒平瓦・軒棧瓦の瓦当文様の変遷—」『史学研究収録』14 國學院大學大学院日本史学大学院会
- 加藤晃 1990 「第六章 近世瓦の編年学的考察(1)」『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2 東京大学文学部
- 加藤晃・金子智 1990 「第2章 御殿下記念館地点、山上会館地点検出の瓦について」『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』第3分冊 東京大学遺跡調査室発掘調査報告書4 東京大学文学部
- 加藤晃 1992 「江戸瓦の変遷—加賀藩本郷邸出土の瓦について」『国学院雑誌』93-12
- 金子智 1994 「近世瓦の基本分類—江戸遺跡出土品を中心に—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊第20冊哲学・史学編』
- 金子智 1996 「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒棧瓦の地方色」『古代』第101号 早稲田大学考古学会
- 金子智 1997 「近世瓦の刻印」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第43輯第4分冊
- 金子智 2003 「江戸における近世瓦の様相」『関西近世考古学研究』XI 関西近世考古学研究会
- 金子智 2013 「近世瓦の文様と装飾—江戸遺跡出土資料の分析から」『技術と交流の考古学』同成社
- 樺四門 2016 『東京都新宿区 尾張徳川家下屋敷跡IX』学習院・樺四門
- 埼玉県神社庁 1998 『埼玉の神社』
- 埼玉県立民俗文化センター1986 『埼玉のかわら』埼玉県民俗工芸調査報告書第4集
- さいたま市 2007 「神社明細帳」『さいたま市史料叢書』6
- さいたま市遺跡調査会 2013 『岩槻城三の丸武具蔵跡第5地点 (仮称) 人形会館整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』さいたま市遺跡調査会報告書 第143集
- 杉本宏 2000 「棧瓦考」『考古学研究』第46巻第4号
- 第66回埋蔵文化財研究集會事務局 2017 『幕藩体制下の瓦-近世都市遺跡における生産と流通- 第66回埋蔵文化財研究集會 発表要旨・資料集』
- 東京都埋蔵文化財センター 2002 『尾張紀州藩上屋敷跡遺跡 IX』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第113集
- 名古屋埋蔵文化財センター 1994 『名古屋城三の丸遺跡 第4次・5次発掘調査—遺物編—』
- 山崎信二 2008 『近世瓦の研究』奈良文化財研究所学報 第78冊
- 山崎信二 2012 『瓦が語る日本史 中世寺院から近世城郭まで』吉川弘文館
- 雄山閣 1972 『新編武蔵風土記稿』第十巻 大日本地誌大系巻

## 第3節 まとめ

今回の調査により、愛宕神社の社殿南側には良好な状態で大構の土塁が保存されていることが確認された。堀に沿って構築された土塁は概ね北東から南西方向に延伸し、愛宕神社の社殿付近ではその土塁が東側へ突き出して構築されていることが確認された。また、現況では東側と西側の道路際はコンクリートの擁壁となっており、擁壁の際まで盛土がされているが、本来の土塁は神社の社殿西端付近までであったものと思われる。

## 第 2 部

### 埋蔵文化財確認調査

さいたま市教育委員会では、埋蔵文化財包蔵地内での土木工事に先立ち提出された埋蔵文化財発掘の届出・通知や範囲確認調査依頼に基づき、確認調査を実施している。確認調査は主に二つの方法にて実施している。

- A：試掘を行い遺構・遺物の有無、内容を確認する
- B：現地調査で地形変化等が確認される場合、近隣の調査状況や地形から判断される場合、解体時や施工時に確認する場合など

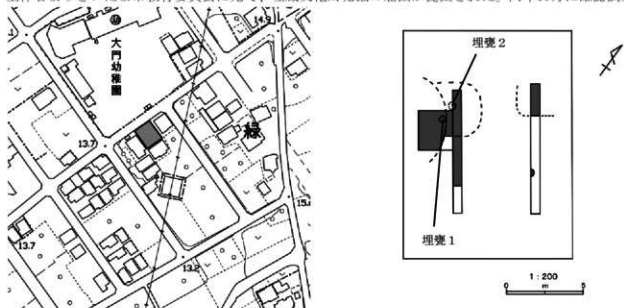
発掘届受理件数については、平成26年度では542件、平成27年度では632件、平成28年度では761件に及ぶ。また、試掘・確認調査実施件数については、平成26年度では310件、平成27年度では319件、平成28年度では329件となっている。発掘届受理件数と試掘・確認調査件数ともに増加傾向にある。

この中で、確認調査を実施して遺構及び遺物が確認されたが、発掘調査に至らなかった平成27年度実施の櫛谷遺跡、平成28年度実施の小深作遺跡、平成29年度実施の飯塚原地遺跡の出土遺物の報告を掲載する。

#### 第 I 章 櫛谷遺跡確認調査出土遺物

##### 第 1 節 調査の契機

平成27年6月、櫛谷遺跡の範囲内のさいたま市緑区大門における個人専用住宅建設計画に伴い、工事主体者よりさいたま市教育委員会に宛て、埋蔵文化財発掘の届出が提出された。同年10月に確認調査を



第19図 遺跡の位置と遺構・遺物出土状況

## 確認調査

実施したところ、縄文時代の竪穴住居跡や縄文土器などの遺構・遺物が確認されたことから、ただちに遺跡の保存についての協議を行った。今回の工事計画では遺跡に影響が及ぼされないと判断されたため、工事主体者に対しては工事の際に立会が必要である旨、通知した。同年11月に工事施工の連絡を受け、基礎根切り工事実施時に立ち会いを行ったところ、縄文時代の土器片の出土が確認された。このため、一旦工事を中断し、掘削部分の精査を行い遺物の記録と回収作業を行った。以下に報告する資料は確認調査及び工事立ち会いの際に出土したものである。

## 第2節 遺構と遺物

### 1 遺構

露出した範囲からは、竪穴住居跡が2軒検出された。竪穴住居跡は形態が略円形で、直径がおよそ3m～5mと推測される。それぞれの竪穴住居跡からは埋甕が1基確認された。埋甕は、入口部と推測される住居跡の縁辺に、いずれも正位で直立して埋設されていた（第19図）。堀方は不明で、土器のみを記録、回収している。

### 2 遺物

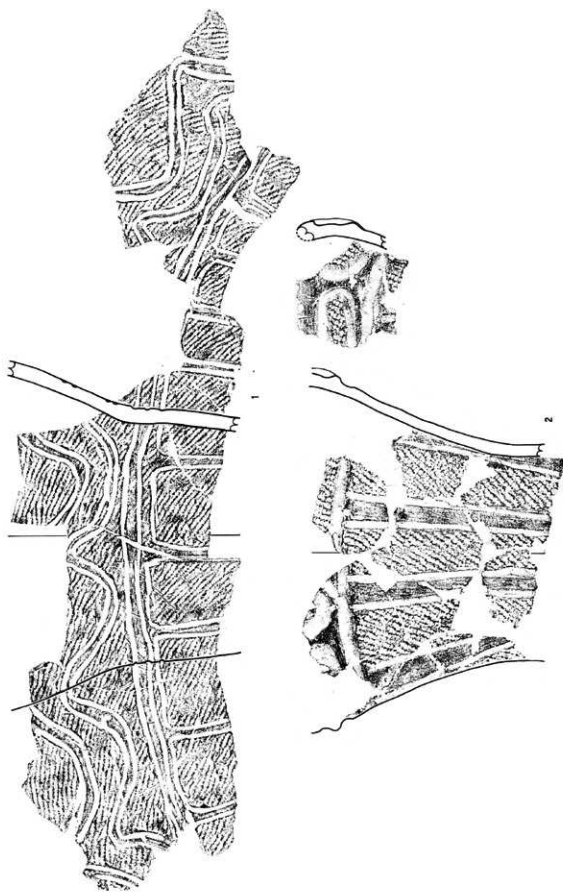
#### 1 埋甕（第20図1、2）

第20図1は、埋甕として転用された深鉢形土器である。胴部下半は打ち欠かされている。器厚は11mmで残存高17.3cm。残存率は40%である。色調は口縁部が暗褐色、胴部が明褐色で口縁部上半に煤が付着している。器面調整では、口縁部内面にヨコミガキ、胴部内面にタテミガキが認められる。地文として無節L縄文が縦位に施された後、幅3mmの沈線によって口縁部と胴部が区画される。口縁部には2本1組の沈線による2段の波状文、胴部には単沈線によるII状文が施文されている。沈線間の一部に地文の磨消が認められる。以上の特徴から、縄文時代中期後葉の連弧文土器2b～3段階（永瀬2008）に当たるとみられる。

第20図2は、埋甕として転用された深鉢形土器である。残存高は17.3cm、残存率は30%程度で、口唇部と胴部下半は欠失し、後者は打ちかかっていると推測される。色調は胴部上半が暗褐色、下半が明褐色である。煮沸の痕跡が顕著であり、内面も煮沸による剥落が認められる。器厚は8～9mmである。胎土には1mm前後の白色粒子が多量に含まれている。地文として単節RL縄文が縦位に施文された後、口縁部に隆帯による渦巻文が4単位施されている。胴部には幅5mmの凹線による懸垂文が施文され、凹線間の地文は磨消されている。隆帯の渦巻文脇にもナデ調整が施されている。文様構成から縄文時代中期後葉の加曾利E3b式に比定される。

#### 2 遺物包含層出土土器（第21図1～28）

1は深鉢形土器の口縁部である。胎土には白色粒子、風化黒雲母（金色雲母）が多量に含まれている。色調は黄褐色。口唇部は角頭状であり、内面に若干の稜が認められる。口辺部には断面カマボコ状の隆帯による楕円形区画文、区画文内部には竹管状工具による1条の刺突文が施文されている。文様の特徴から、縄文時代中期中葉の阿玉台Ib式に当たるとみられる（塚本2008）。2は深鉢形土器の口縁部である。口縁部は内湾し、口唇部はやや外反しながら立ち上がる。口唇部上、及び口縁部には先の鋭い工具による1条の押し文が施されている。胎土には白色粒子、風化黒雲母（金色雲母）が多量に含まれて



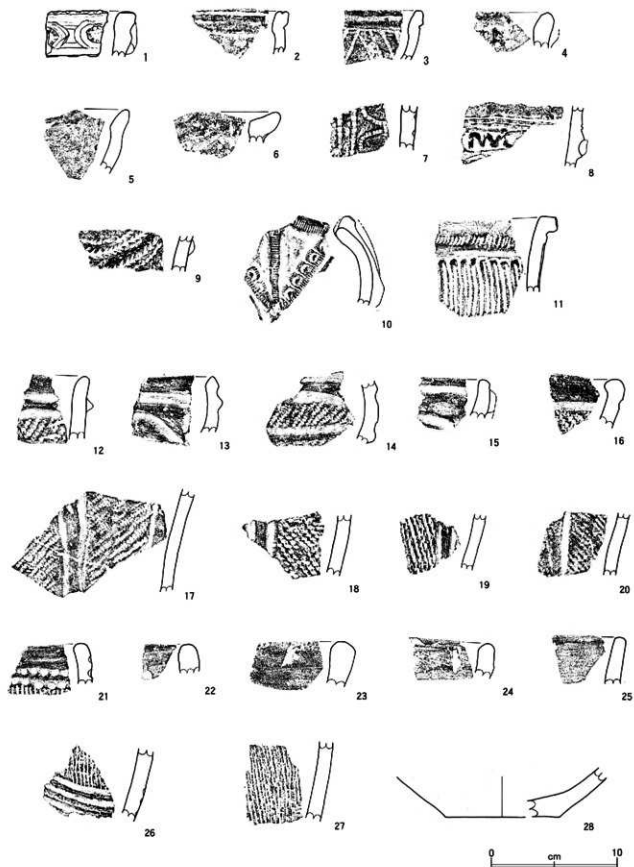
第20圖 柵谷遺跡竪穴住居跡出土埋藏

## 確認調査

いる。時期は、阿玉台Ⅰb式に比定される。3は、深鉢形土器の口縁部である。やや内湾する器形で口唇部は外反し、内面に稜を有する。色調は明褐色で胎土には微細な風化黒雲母が多量に含まれている。幅2mmの細い棒状工具による角押文が施されている。時期は、阿玉台Ⅰb式に比定される。4は深鉢形土器の口縁部である。色調は暗黄褐色で胎土には白色粒子、風化黒雲母が多量に含まれている。口唇部形態は内削ぎでやや外反する。外面に突起が付されていたとみられるが、欠失している。阿玉台Ⅰb式に位置づけられると推測される。5は深鉢形土器の口縁部である。波状口縁を呈し、口縁部は内湾し、口唇部はやや外反しながら立ち上がる。色調は黒褐色で胎土には風化黒雲母が多量に含まれている。時期は、阿玉台Ⅰ～Ⅱ式に該当するとみられる。6は、深鉢形土器口縁部の突起部分とみられる。色調は明褐色で、胎土には微細な白色粒子と風化黒雲母が多量に含まれている。突起形状は扇形であり、外面にはヘラ状工具による刻みが施されている。文様や形態から阿玉台Ⅰb～Ⅱ式に位置づけられる。7は深鉢形土器の胴部である。色調は暗黄褐色で胎土には多量の白色粒子、風化黒雲母のほか、結晶片岩が含まれている。幅3mmの竹管状工具による角押文が施されている。文様の特徴から、縄文時代中期中葉の阿玉台Ⅰb式に比定される。8は深鉢形土器の胴部である。胎土には白色粒子、風化黒雲母（金色雲母）が多量に含まれている。色調は暗黄褐色。断面三角形の隆起線が2本、平行するように貼り付けられ、その間に波状粘土紐が貼付されている。このほか、半截竹管による有筋沈線文、単沈線が施されている。時期は、文様や施工工具の特徴から、縄文時代中期中葉の阿玉台Ⅱ式に位置づけられるであろう。

9は、深鉢形土器の胴部である。断面カマボコ状の隆帯による弧線文が施文された後、隆帯に沿って三角押文が2列施されている。10は深鉢形土器の口縁部である。口唇部はやや肥厚し、内面に稜がある。口縁部外面には逆三角形の粘土板が貼り付けられている。口唇部に突き出るように突起が付されていたとみられるが、欠失している。粘土板の輪郭に沿って半截竹管状工具による沈線、及び粘土板上には同一工具による刺突文が施文された後、粘土板の縁辺と垂下する隆帯上にヘラ状工具による刻みが施されている。時期は、文様等の特徴から縄文時代中期中葉の勝坂2式とみられる。11は深鉢形土器の口縁部である。口縁部は直立して立ち上がり、口唇部が外側に屈曲する。口唇部外面には竹管状工具による陰刻文が施されている。口縁部には、半截竹管による刺突文が施された後、同一工具による縦位の沈線が施文されている。胎土には、白色粒子が少量含まれている。時期は、文様要素から縄文時代中期中葉の勝坂2式、もしくは3式に比定される。

12は、深鉢形土器の口縁部である。口縁部はほぼ直立して立ち上がり、口唇部が若干外反する。単節RL縄文が施文された後に、断面カマボコ状の隆帯による区画文が施される。色調は明褐色で胎土には白色粒子が多量に含まれている。時期は、縄文時代中期中葉の加曾利E2～3式に該当するとみられる。13は、深鉢形土器の口縁部である。器形は、口縁部が内湾するキャリバー形で波状の突起が付されていたとみられる。外面に隆帯による区画文が施された後、区画文に沿って凹線が施されている。時期は、文様の特徴から加曾利E3a～3b式に比定される。14は、深鉢形土器の口縁部である。地文として単節RL縄文が縦位に施された後、隆帯による区画文が施される。隆帯脇には凹線が加えられている。色調は明褐色で胎土には白色粒子、風化黒雲母が少量含まれている。縄文時代中期後葉の加曾利E3b式に比定される。15は、深鉢形土器の口縁部である。器形は、口縁部が内湾するキャリバー形を呈している。隆帯による口縁部区画文が施文された後、口唇部外面と区画内部に凹線が描出されている。胎土には、微細な白色粒子が少量含まれている。色調は明褐色である。時期は、縄文時代中期後半の加曾利E3a～3b式に比定される。16は、深鉢形土器の口縁部である。色調は明褐色で、微細な白色粒子と風



第21図 遺物包含層出土土器

## 確認調査

化黒雲母が含まれている。地文として複節LRL縄文が横位に施された後、幅7mmの回線が施されている。時期は、縄文時代中期後葉の加曾利E3式に位置づけられる。深鉢形土器の胴部である。色調は橙色で、上部には煤が付着している。胎土には白色粒子、赤色粒が含まれている。地文として異条のRL縄文が縦位に施された後、幅3～4mmの沈線による懸垂文が施文される。時期は、縄文時代中期後葉の加曾利E3a式に当たる。18は、深鉢形土器の胴部である。色調は明褐色で、胎土には白色粒子が多量に含まれている。内面には丁寧なタテミガキ調整が施され、光沢がある。地文として、複節LRL縄文が縦位に施された後、幅5mm前後の回線による懸垂文が施されている。沈線間の地文は磨消されている。時期は、縄文時代中期後葉の加曾利E3式である。19は、深鉢形土器の胴部である。色調は明褐色、胎土には白色粒子、風化黒雲母が含まれている。地文として単軸絡条体L縄文が斜位に施された後、幅4～5mmの沈線による懸垂文が施文されている。沈線間は磨消されている。時期は、縄文時代中期後葉の加曾利E3式に比定される。20は、深鉢形土器の胴部である。色調は明黄褐色で白色粒子が少量含まれている。地文として単節LRL縄文が縦位に施された後、幅5mmの単沈線による懸垂文が施文されている。沈線間は磨消されている。縄文時代中期後葉の加曾利E3式に比定される。

21は、深鉢形土器の口縁部である。やや内湾する器形で口唇部は断面丸形である。地文として単軸絡条体R縄文が縦位に施された後、幅6mmの円形押捺文が2列施文されている。時期は、文様の特徴から連弧文土器3段階とみられる。22は、深鉢形土器の口縁部である。色調は橙色で胎土には白色粒子が少量含まれている。やや内湾する器形で口唇部は断面丸形である。円形押捺文が施されていることから、縄文時代中期後葉の連弧文土器3段階とみられる。23は深鉢形土器の口縁部である。大型の土器とみられ、小片ながらほとんど湾曲が認められない。口唇部は断面丸形でやや肥厚する。色調は明褐色で胎土には白色粒子が少量含まれている。文様は認められないが、口辺部の無文帯は型式学的には連弧文土器の特徴といえ、時期は3段階に位置するとみられる。24は、深鉢形土器の口縁部である。口唇部は断面丸形で内外面ともに丁寧なヨコミガキが施されている。連弧文土器の3段階に位置づけられると推測される。25は、深鉢形土器の口縁部である。口唇部はやや面取りされ、隅丸の形状である。内外面共にヨコミガキ調整が施されている。時期は、縄文時代中期後葉に位置づけられる。26は、深鉢形土器の胴部である。色調は黄褐色で、胎土には微細な白色粒子、風化黒雲母が少量含まれている。地文として単軸絡条体R縄文が縦位に施文された後、幅4mmの単沈線による弧線文が描かれている。沈線間の地文は磨消されている。縄文時代中期後葉の連弧文土器3段階に位置づけられる。

27は、深鉢形土器の胴部である。色調は明褐色で、胎土には微量の白色粒子、角閃石が含まれている。地文として櫛歯状工具による条線が縦位に施された後、先の鋭い工具による懸垂文が施文されている。地文の特徴から、曾利系土器に属するとみられる。28は、浅鉢形土器の底部である。色調は外面が黄褐色、内面が黒色で、胎土には白色粒子が多量、風化黒雲母が微量含まれている。時期は、縄文時代中期後葉と考えられる。

## 【参考文献】

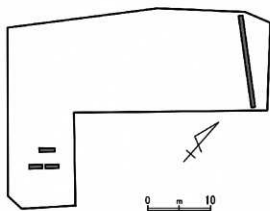
- 今福利恵 2008「勝坂式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション  
塚本師也 2008「阿玉台式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション  
永瀬史人 2008「連弧文土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション



## 第Ⅱ章 小深作遺跡確認調査出土遺物

### 第1節 調査の概要

- (1) 遺跡名 小深作遺跡（県遺跡番号No.12-125）
- (2) 所在地 さいたま市見沼区大字小深作地内
- (3) 調査原因 集合住宅建設
- (4) 調査日 平成28年11月11日、29日
- (5) 調査結果の取り扱い 北側は十分な保護層が確保でき、南側では遺物の出土が見られたが、湧水があり地盤が軟弱で調査困難のため、両側とも現状保存の措置とした。
- (6) 出土遺物の埋蔵文化財認定日 平成28年12月8日



第22図 遺跡の位置と遺構

### 第2節 調査結果の概要

確認調査を実施した対象地は、昭和45年に発掘調査を実施した地点が大半を占めていた。そこで確認調査は、わずかに残る未調査範囲を対象に平成28年11月11日と29日の2回実施した。1回目は敷地北東側で行い、地表下65～70cmで遺物包含層を検出した。2回目は敷地南側で実施し、地表下約100cmで遺物包含層を検出した。なお、敷地南側では地表下約90cmで湧水が見られた。本届出地は北側から張り出す舌状台地の北東縁部にあたり、2回目に調査を実施した地点は南側の谷部への落ち際に該当するものと思われる。

昭和45年に行われた調査では、地山であるローム層が南と東側へそれぞれ傾斜することが確認され、地表下120cmで湧水したことが記録されている。

2回行った確認調査のうち、遺物の出土は1回目に行った北東側で多く、南側は少量の出土にとどまった。今回報告を行うのは、多量に出土した北東側地点（1回目）の資料である。

## 第3節 出土遺物（第23図）

1は後期前葉、堀之内1式の深鉢胴部で、地文縄文LR施文後蛇行文を垂下させる。内面には縦方向のミガキが施される。2も後期前葉の所謂下北原式の深鉢胴部でナデ調整を施す無文の器面に丸棒状工具による沈線文様が描かれる。内面には横方向のミガキ調整が施される。3は加曾利B1式の内面文様を伴う浅鉢口縁部で口唇部にキザミを施す。4は後期前葉～中葉の深鉢底部で底面にはナデ調整が施される。5、6は口縁部と胴部に格子目を描く深鉢の頸部と口縁部である。5は先端が鋭利な工具により格子目および無文部の区画沈線を深く描く。一方の6は先端丸棒状の工具で浅く描き、内面の沈線も消失していることから、5は加曾利B2式、6は加曾利B3式に比定されよう。7は加曾利B3式波状口縁深鉢の口縁部で口縁端部に縦方向のキザミ、口縁部にLRの縄文を施文する。8も加曾利B3ないし曾谷式の波状縁深鉢の口縁部で、キザミを施す口縁端部の区画が7より幅広くなっており、後出の様相を示す。

9、10は安行1式台付鉢の台部で、それぞれ焼成前の穿孔を2カ所伴う。9は小形の作りであることから異形台付土器の台部になる可能性もある。11～15は安行2～3a式である。11は平縁深鉢で口縁部と頸部の隆起帯には単節RLの縄文が施文される。12、13は波状縁ないし平縁深鉢の胴部下半で、12は豚鼻状の装飾以下に下から上方向に施文された浅い条線文を有し、13は下向きの弧線文の連結部に、押捺を3つ加えた装飾を2個貼り付ける。14、15は縄文施文部を隆起させない一群の平縁深鉢と浅鉢の口縁部である。14は稲妻状の沈線文を描き、右端に蛇行垂線文を描く。15は弧線文施文後に単節RLの縄文が充填される。左側の弧線文直上の口唇部には沈線による装飾が描かれる。右端の口唇端部にも同様の装飾の一部が確認できる。これらの装飾は瘤状の貼付を省略して直接口縁部に沈線文様を施したものである。

16、17は晩期前葉安行3a式で、16は波状縁深鉢の口縁部であり、二段目の縄文帯の直上に三叉文の端部が見られる。17は浅鉢ないし鉢の頸部で、頸部に押捺を加えた隆帯を貼付し、口唇部には沈線が周回する。

18は安行3b式の深鉢口縁部で口唇部には双山の瘤を貼付する。内外面明黄褐色を呈し、器面には細かなヒビも見られることから二次焼成を受けていることが確認できる。19は安行3bないし3c式の角底形土器の角端部でナデ調整を施した無文の器面にやや太めの沈線による文様装飾が施される。底面にも沈線の一部が確認できることから底面にも文様が施されていた可能性がある。

20～27は紐線ないし附点紐線文土器である。20は頸部に施された区画帯が重複して描かれる。器形は直立かやや内傾することから安行1式ないし同2式になろう。21～23は安行2～3a式の頸部で21、22は列点、23は粘土紐によるキザミを伴う装飾が施される。24は安行3a式の口縁部で、頸部には浅い条線施文後、充填縄文を伴う弧線文が描かれる。25は底部、26、26は底部付近でいずれも下から上方向に条線が施される。

28は小形の台付鉢の台部である。29～31は無文深鉢の口縁部と胴部で29は口縁部が角頭状を呈し、一部輪積みの痕跡が確認される。30は口縁部が先細る。内外面摩耗が著しい。31の胴部片は縦方向のケズリ調整を施す。輪積み部を中心に器面の凹凸が2段確認できる。これらはいずれも晩期中葉に位置づけられるであろう。



第23図 小深作遺跡確認調査出土遺物

## 第4節 まとめ

本地点の資料は、昭和45年に調査が行われた地点の北側隣接地から出土したものである。調査により出土した土器は、後期前葉堀之内1式から晩期中葉安行3bないし3c式までの資料であり、昭和45年調査時の出土資料の時期に収まるものであった。その中で、後期前～中葉の遺物が少なく、後期後葉から晩期前葉の資料が多かったのは、今回の調査が包含層の上面でとどまり、下層まで調査を行わなかったことに起因すると考えられる。

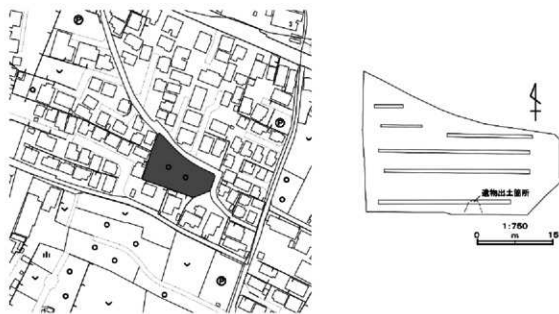
なお、南側の調査区では遺物の出土が少なく湧水が昭和45年調査より浅い深度で確認された点は、台地の南限を考えると一つの手がかりとなろう。

## 第三章 飯塚原地遺跡確認調査出土遺物

### 第1節 調査の概要

- (1)遺跡名 飯塚原地遺跡（県遺跡番号77-046）
- (2)所在地 さいたま市岩槻区城南五丁目
- (3)調査原因 分譲住宅
- (4)調査日 平成29年10月26日
- (5)調査結果の取り扱い 慎重工事指示。遺構は検出されなかったが、一部攪乱箇所遺物が確認された。
- (6)出土遺物の文化財認定 平成29年11月7日

### 第2節 調査結果の概要

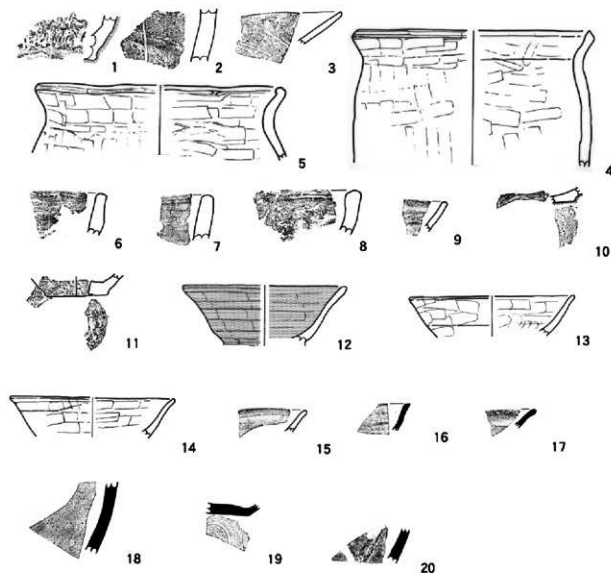


第24図 飯塚原地遺跡の位置及び調査の概要

当遺跡はさいたま市の東部・岩槻区城南5丁目地内の洪積台地上、大宮台地東縁の岩槻支台上に位置する。過去に発掘調査が4箇所で行われており、縄文時代中期、古墳時代、平安時代の住居跡が確認されており、かなり長い年月にわたり集落を営んでいたものと考えられている。

本調査は遺跡内の東側に位置しており、面積が981㎡と広大であったため、6箇所のトレンチ調査を実施した。敷地の大部分では遺跡は確認されなかったが、最南のトレンチ内の攪乱箇所では遺物が確認された。攪乱の状態はローム粒と地表面の土が混ざり合っており、遺物数点が確認された。遺物は縄文時代から中世のものと考えられており、この箇所にのみ集中して出土したことから、過去に住居跡か土坑などが存在していたものと考えられる。

### 第3節 出土遺物



第25図 飯塚原地遺跡確認調査出土遺物

## 確認調査

1は縄文時代前期前葉の関山式の深鉢の破片である。底部に近いものと考えられる。2は深鉢胴部の破片であり、浅い沈線文が施されている。縄文時代後期壺之内式と思われる。3は土師器の口縁から胴部にかけての破片であり、表裏にミガキが施されている。裏に赤彩が施される。4及び5は甕の口縁部の破片であり、外反している。口唇部は中に折り込まれており、ヨコハケメ、口唇部直下にタテケズリが施されている。裏はヨコハケメが施されている。奈良・平安時代の遺物と考えられる。6は鉢の口縁部であり、表面はタテケズリが裏面にはヨコハケメが施されている。粒子が荒い。7は鉢の口縁部でヨコハケメが施されている。また、全体に赤彩が施される。8は鉢の口縁部であり、ヨコハケメが施されている。中世の遺物と考えられる。9は坏の底部破片であり、回転ロクロ成形痕が見られる。10は坏の底部の破片であり、はっきりした回転ロクロ痕が見られる。11は坏の底部破片であり、つくりは荒い。わずかに回転ロクロ痕が見られる。12は坏の破片であり、ロクロ整形、回転の跡がある。底に糸切痕が確認される。13及び14は坏の口縁部の破片であり、口唇部がやや外反している。ヨコハケメが施されている。15は坏の口縁部の破片で、外反している。回転ロクロ成形の跡がある。16及び17は須恵器の坏の破片であり、回転糸切痕が見られる。18は須恵器の甕と思われる胴部の破片である。19は坏の底部の破片であり、回転糸切の跡が明確にみられる。20は備前焼の碗の胴部破片であり、表裏に釉が塗られている。



(1) 第1号土塁



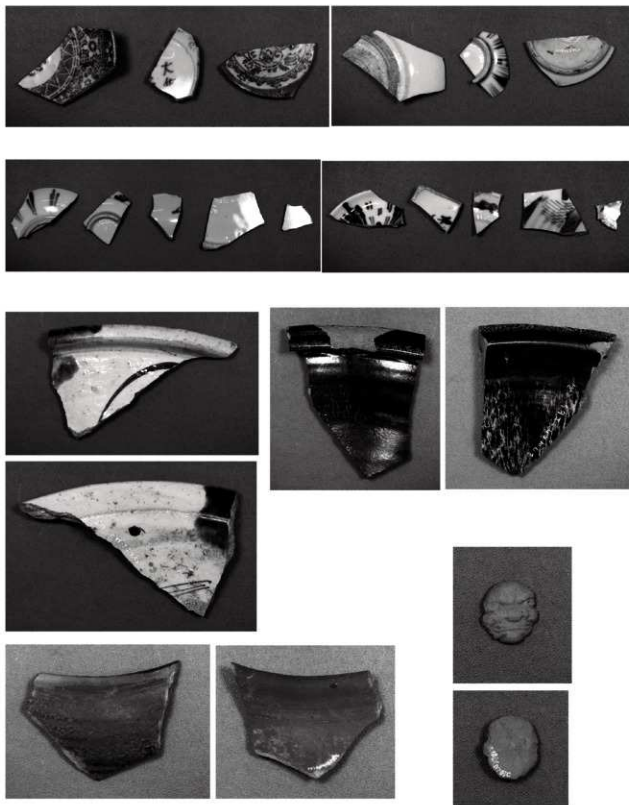
(2) 第2号土塁

图版 2 岩槻城大構



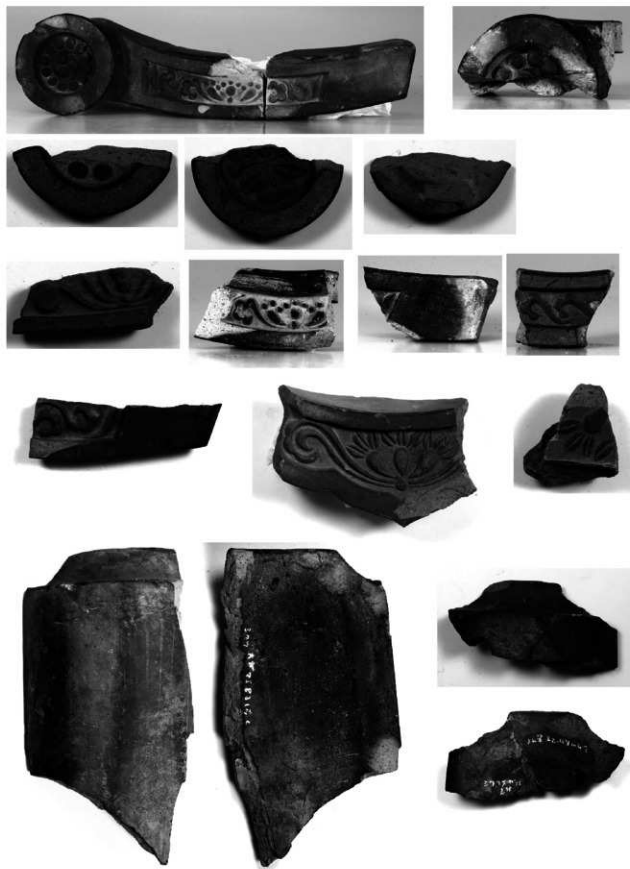
(1) 第7图1~28



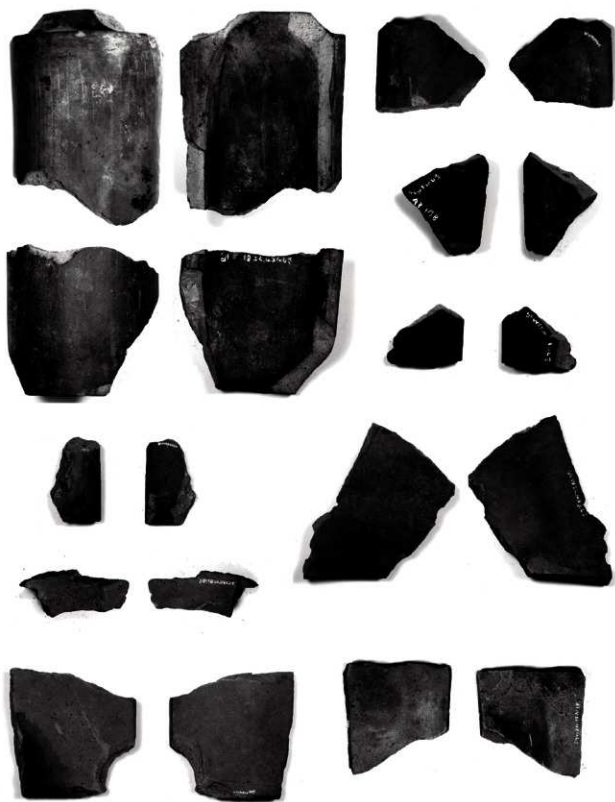


(1) 第8図 29~40

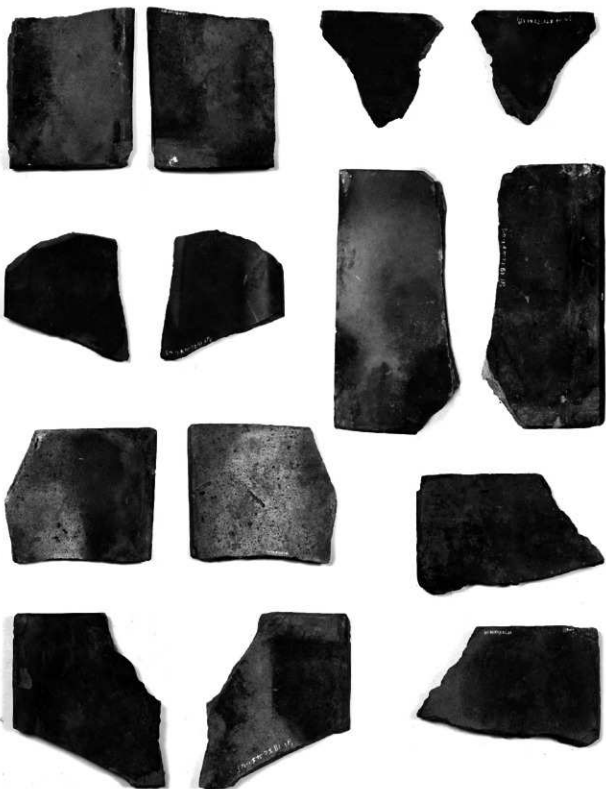
图版 4 岩槻城大構

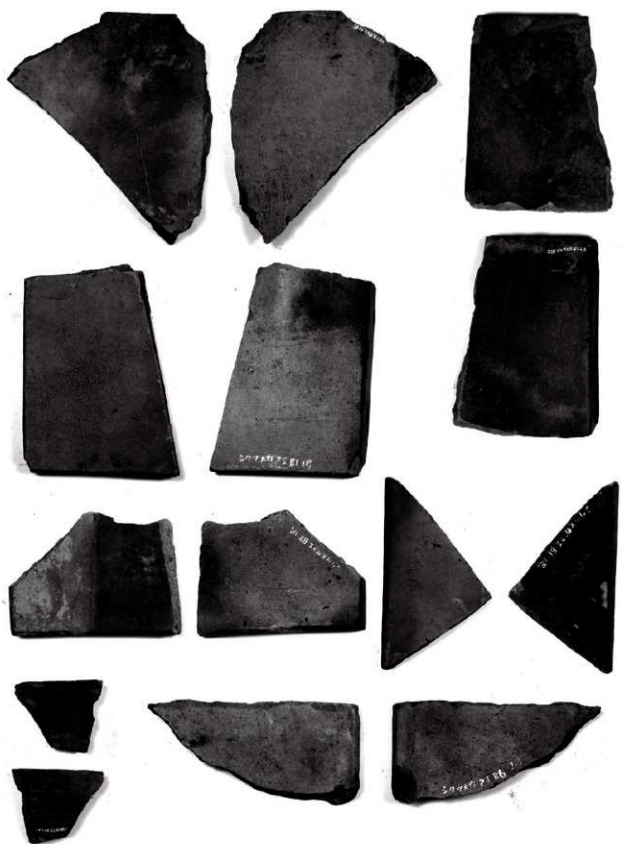


(1) 第9圖1～12、第10圖13・14

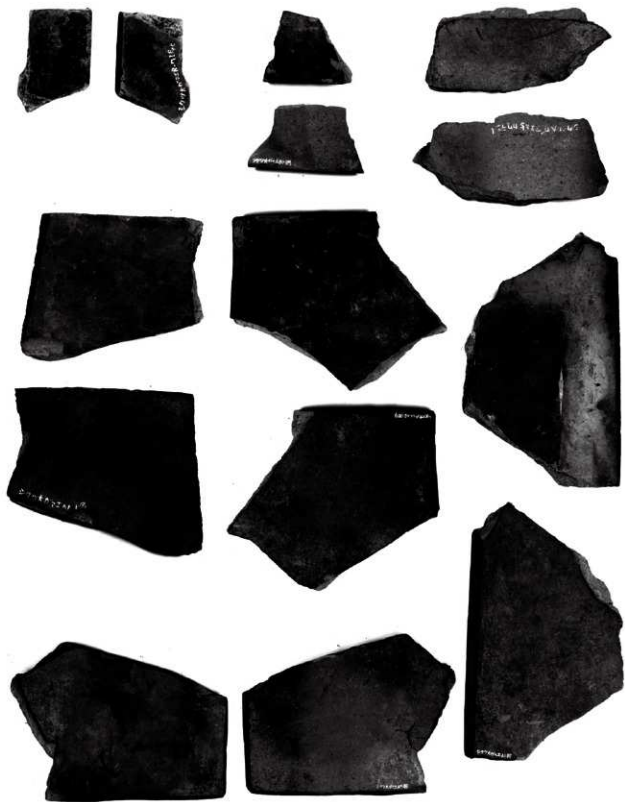


図版 6 岩槻城大構



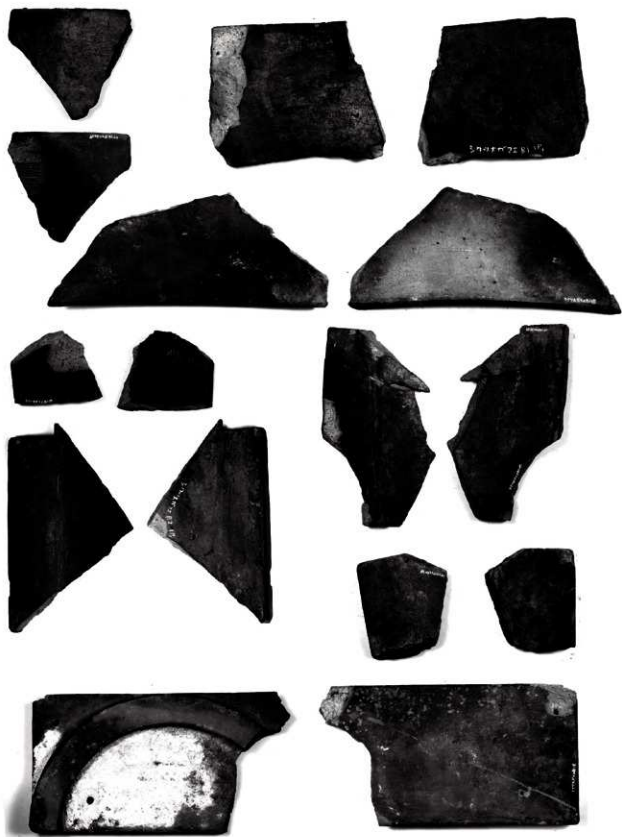


图版 8 岩槻城大構

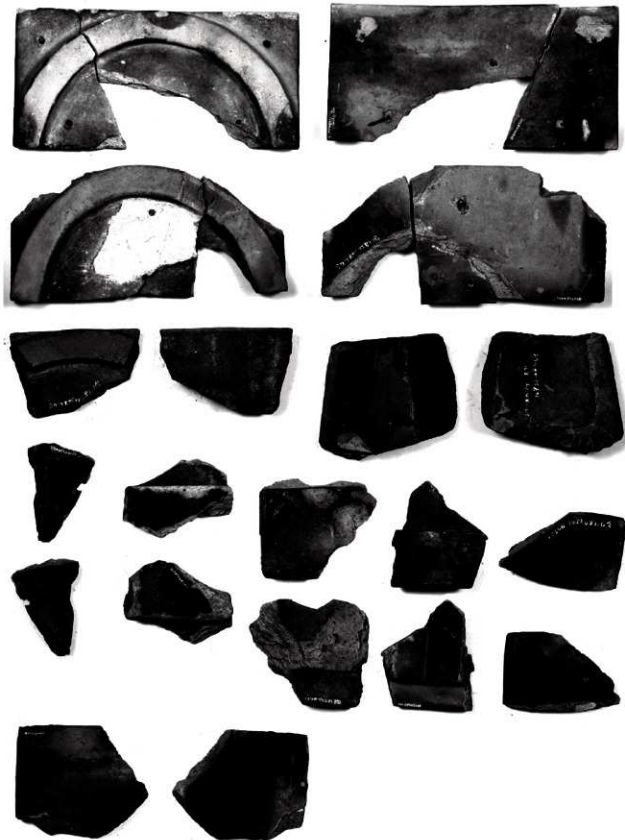




图版 10 岩槻城大構







图版 12 岩槻城大構



(1) 刻印



(2) 漆喰付着瓦・漆喰塊



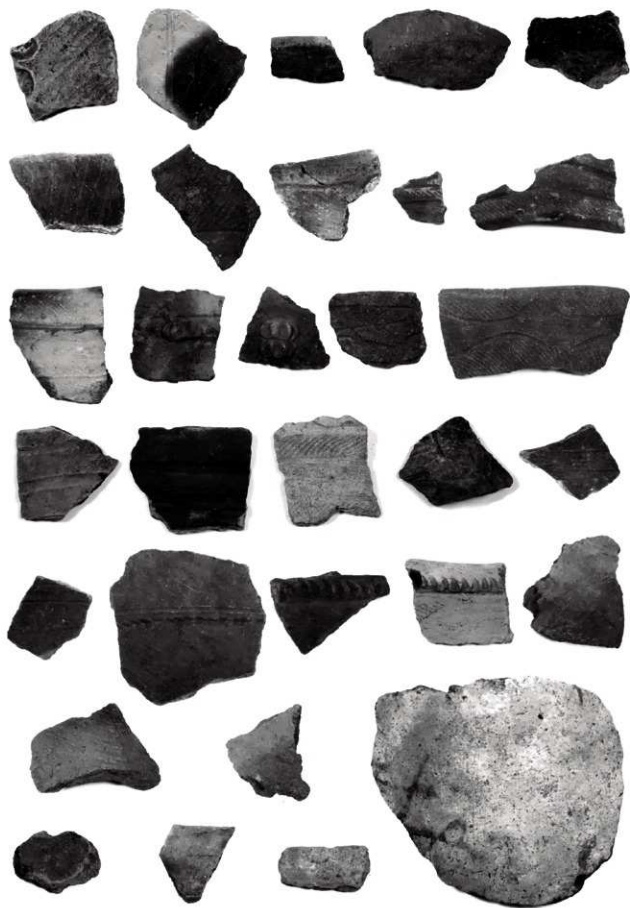
(1) 第20図1



(2) 第20図2

図版 14 柵谷遺跡







報告書抄録

ふりがな	ししていしせきわつきじょうおおがまえかくにんちようさ まいぞうぶんかざいかくにんちようさ							
書名	市指定史跡岩槻城大構確認調査 埋蔵文化財確認調査							
シリーズ名	さいたま市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第13集							
編著者名	関根俊雄 鈴木久雄 永瀬史人 吉岡卓真 元林恵子							
編集機関	さいたま市教育委員会							
所在地	330-9588 埼玉県さいたま市浦和区常盤6丁目4番4号					TEL 048-829-1724		
発行年月日	2018年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
市指定史跡 岩槻城大構	さいたま市 岩槻区本町 三丁目	11110	77-210	35° 57' 6"	139° 41' 43"	2015.06.08 ～ 2015.06.23	18	範囲確認調査
櫛谷遺跡	さいたま市 緑区大字 大門	11101	01-077	35° 52' 49"	139° 44' 2"	2015.06.24	165	個人住宅建設
小深作遺跡	さいたま市 見沼区大字 小深作	11104	12-125	35° 56' 17"	139° 39' 48"	2016.11.11 2016.11.29	836	集合住宅建設
飯塚原地遺跡	さいたま市 岩槻区城南 五丁目	11110	77-046	35° 56' 21"	139° 43' 3"	2017.10.26	981	分譲住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
岩槻城大構	城館跡	戦国時代 江戸時代	岩槻城跡大構	近世陶磁器・瓦		市指定史跡岩槻城大構で史跡の保存状況を確認するための調査。土塁の構築面が良好な状態で保存されていることを確認した。		
櫛谷遺跡	集落跡	旧石器時代 縄文時代 平安時代	縄文時代の住居跡	縄文時代の土器		試掘・確認調査にて、住居跡及び住居跡内の埋燹の調査を実施。保護層が確保できるため、現状保存の措置とした。		
小深作遺跡	集落跡 墓	旧石器時代 縄文時代 平安時代	縄文時代後期の遺物包含層	縄文時代の土器		東側は十分な保護層が確保でき、南側では遺物の出土がみられたが、湧水があり地盤が軟弱であったため、現状保存の措置とした。		
飯塚原地遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代 奈良時代 平安時代	—	縄文時代土器 奈良～平安時代の土器		遺構は存在していなかったが、一部視乱箇所に縄文時代前期、後期並びに奈良～平安時代の土器を検出した。		
<b>要約</b>								
<p>岩槻城大構の確認調査結果と、試掘確認調査実施後の発掘調査に至らなかった3遺跡の出土遺物調査結果を収録した。  <b>岩槻城確認調査</b> 岩槻城を取り囲んでいた大構（土塁）の調査を実施した。良好な状態で保存されている土塁の構築面を検出した。  <b>埋蔵文化財確認調査</b> 平成27年度に実施した櫛谷遺跡、平成28年度に実施した小深作遺跡、平成29年度に実施した飯塚原地遺跡の確認調査の結果及び概要、出土遺物の調査を実施した。</p>								

---

さいたま市埋蔵文化財調査報告書 第13集

岩槻城大構確認調査  
埋蔵文化財確認調査

平成30年3月31日 発行

編集 さいたま市教育委員会生涯学習部文化財保護課  
発行 さいたま市教育委員会  
埼玉県さいたま市浦和区常盤6-4-4

---